Movie Review　16　#夜の来訪者

『#夜の来訪者（An Inspector Calls)』(2015 年）を amazon prime video で視聴した。アシュリング・ウォルシュ監督。英国の劇作家Ｊ・Ｂ・プリーストリーの同名の戯曲の映画化。1954 年、ガイ・ハミルトン監督作品のリメイクである。

チョットした悪意や意地悪、懲罰、不信感、蔑視等が積み重なって一人の女性を追い詰めてゆく。家族それぞれが引き起こす別々の出来事が一人の女性を次々と窮地に追い込む。
英国の田舎町で豊かに暮すＢ家で、娘ＳとＪの婚約を祝っている夜、警部Ｐと名乗る男が訪れ、病院で服毒自殺した女性に関することの尋問を始める。主人Ａは、女性の写真から、彼の工場での二年前のストライキを組織したことを理由に、解雇した女工であることを知った。次に写真を見せられた娘 S は、ある帽子店で自分が帽子を見立てているとき、女店員の笑いを咎め、主人を呼びつけて大袈裟に騒ぎ立て、その女店員を首にさせたことを思い出した。それがこの女性であった。警部の次の質問は婚約者Ｊに向けられた。彼には、ある酒場でいかがわしい女たちに交って純情そうな一人の女の危難を救ったのがきっかけで彼女と関係を結んだ記憶があった。それがこの女性だったのだ。次に質問された母 C も町の慈善協会幹事として、二週間ほど前、妊娠した女が救いを求めに来たのを嘘つきと決めつけて追い返したが、写真を見て彼女がその女性であることを知った。そのとき C は、彼女をこんな境遇に陥れた男に責任を負わすべきだと主張したが、その男が自分の息子 E であったのだ。警部の前で包み隠さず E はすべてを告白した。この女性に対する一同の罪を暴いて、警部が帰りかけると、Ｊが一同に彼が偽警部であることを素破ぬいた。警察に問い合わせるとそんな警部は在籍していなかった。また病院にも問合せると自殺者はいないという答えであった。一杯喰わされたと憤慨するも、一同は安堵して飲食を再開して華やいだ雰囲気がもたらされる。

暫くして、病院から電話がかかり、女性の自殺者が今運ばれて来たと通知があった。屋敷にはすでに警部の姿はない（女性が自殺したことを予告した警部は誰だったのか、そもそも存在したのか)。

見終わって、日々を誠実に後悔なく生きなければと思い直した作品であった。